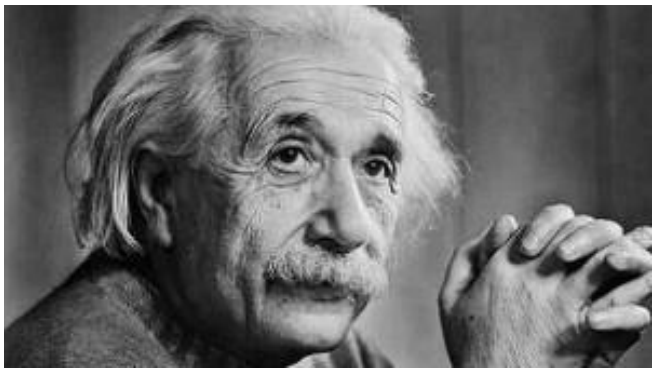
真のエリート教育　前編

皇紀 2676 年、平成 28 年の佳き歳を迎え、志雲会も目出度く船出致しました。

世界は今、西欧の「産業革命」以来の物質文明に拠って、急速に環境は破壊に向かい、人類も破滅の瀬戸際に立たされようとしている。宗教の名を借りた過激主義の横暴、ロシアの拡張主義、地域覇権主義国の無法行為、……と人類社会は無秩序化の方向に走りつつあるように見える。

日本は、と見ると、外には非常識な隣国や、容赦ない覇道国家に囲まれ、内には GHQ によって作られた「日本統治法」＝「現日本憲法」によって、日本伝統の「高貴な精神文化」の魂を抜かれた、偽善的な反日思想の毒に侵され、毒に固まった自称進歩的文化人・知識人・学者・教育者等の存在に悩まされ、憲法改正さえままならぬ状況に置かれている。又、国の「在り様」を決定すべき国会では「政策の討議ではなく、個人や政党に関する足の引っ張り合い」の攻め合いの場となっている。正に国政の討議の場ではなく、裁判所での攻防の如きに惰している。今後日本は如何なる進路を取るのか？難しい立場に立っている。今の政治家に、特に野党議員に危機の認識があるのか疑う。

私は、どうも世界はアインシュタインの予言通りに動いているように思えてならない。世界は宗教で救われるか？　またはイデオロギーで救われるのか？現実には同根から枝分れした宗教にも関わらず、殺し合いがいたる所で起こっており、宗教は麻薬だと言いながら、宗教の名を借りたイデオロギーが麻薬となり人々の心を蝕み、殺し合い、世界を恐怖と混乱に陥れている。



アルベルト・アインシュタイン

注）アルベルト・アインシュタインの言葉
世界の未来は進むだけ進み、その間幾度か戦いは繰り返されて、最後には戦いに疲れる時がくる。その時人類はまことの平和を求めて、世界的な盟主を挙げねばならない。この世界の盟主なるものは、武力や金力ではなく、凡ゆる国の歴史を抜き越えた、最も古くまた尊い家柄ではなくてはならぬ。 世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。 吾々は神に感謝する、吾々に日本という尊い国を、作って置いてくれたことを。

イデオロギーに於いても、「共産主義」はトップに関わる指導的立場の人々が「無私無欲の賢人君子」でなければ、この社会制度は成り立たないのは歴史的事実である。共産主義の思想は正しいが、ソ連の指導者が間違っていたから駄目になったと左派の人達が述べているが、大きな間違いである。人間という本質を考慮しない共産主義の思想は、人間社会には向かない、又は適合し得ないのである。共産主義の思想通りには人間の心は作動しなかったのである。

一方、民主主義も同様に、一人一人の人間が成熟し、良識ある判断が出来る教養ある人間である……との条件があってこそ成り立つ社会である。選挙で指導者を選べる自由や権利があるだけ、共産主義社会より「ましな」だけである。民主主義国家に於いても、国民の精神的成熟度が高くなければこの社会制度は成り立たない。指導者層も観念論や詭弁に惑わされず、大局観に基く正しい判断力、臨機応変の対処能力を持つ強いリーダーシップが無ければ、又、公の精神が高貴でなくては権力をマスコミに牛耳られ、行政はポピュリズムに流され、裁判所は民衆の気分を窺いながら判決を出し、弱者（子供・女性・高齢者・障害者・企業に対しての社員等）が常に正義という奇妙な偽善が正当性を持つような社会も出来かねない。そうなると国民は自立心を失い、社会は老化・劣化を招き、ヒトラーの如き合法的な独裁者が生まれる恐れもある。故に民主主義もベストではない。

現実として世論の主体である国民が全員成熟した判断が出来る人になれるとはとても信じられない。民主主義も放っておけば、主権者である国民が戦争を起こし、国を弱体化させ、地球まで滅亡させかねないのである。なぜなら**「すべては人の質による」**のであって、**優れた論理であっても、イデオロギーであっても行ずるのは人であるからだ。**

これから国を救い、国を変えていかねばならない。日本は戦前には欧米の文

明を真似し、戦後はアメリカにより国の形、即ち国柄を潰され、誇るべき品位まで失いかねない状況だ。これから日本を日本足らしめる為には、西洋主導のグローバル化という世界の趨勢に巻き込まれるのでなく、これに反発し、高貴な精神文化を抱く「孤高の日本」を取り戻し、世界人類への範を示せる国家を目指すべきであろう。GHQ は日本のエリート養成機関（旧制中学・旧制高等学校・大学〉を恐れ、真先に潰した。日本がこれから求めるエリートは「東大→官僚」の如き「偏差値エリート」ではない。欧米や各国でもエリート養成機関はあり、自国の為に活躍している。彼等エリートに女性関係のスキャンダルは時々あるが（女性問題はどんな事をしても消えないそうだ)、賄賂や汚職のスキャンダルは中国以外、欧米ではほとんどないと聞いている。彼等エリートには俗世に拘泥しない精神が求められるからだ。

我が祖国が求めるエリートは『第一』に収入には役に立たない、又、関係の無い「文学」とか「哲学」とか「歴史」とか「芸術」等の教養を身につけ、その教養を土台として優れた大局観や歴史観、総合判断力を持っている事。『第二』は最も大切な条件で、「いざ」となれば国家・国民の為に喜んで命を捨てる気概を持っている事である。この条件を満たす為のエリート養成の為には学校教育機関の根本からの改革が必要だが、今の状況ではすぐには出来まい。ならば出来るのは「草の根運動」だ。昔の寺子屋方式を用いて、（日本本来の伝統に基く教育機関が出来上がる迄）「歴史教育」・「武士道教育」を続け、<u>一般社会人の中に多くのエリートを養成しなければならぬ</u>。見本となる五か条の御誓文や教育勅語も残っており、困難な事ではない。

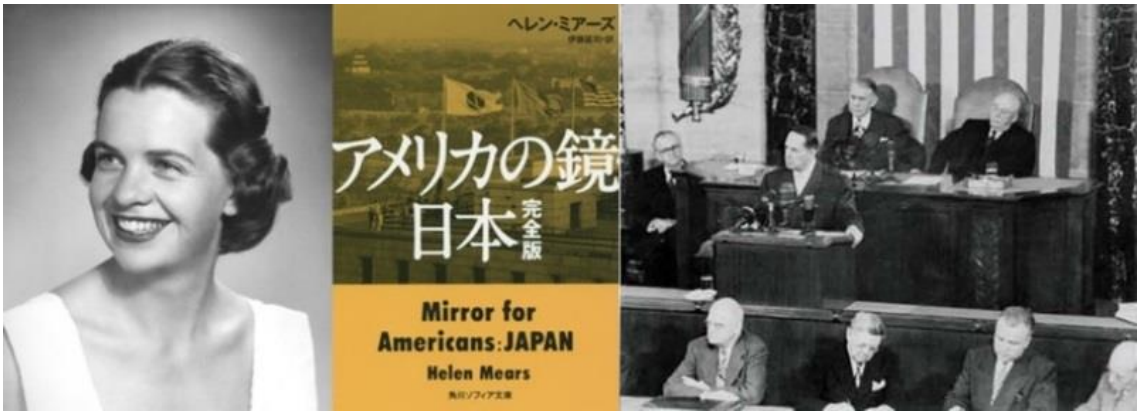
志雲会は歴史教育から学び始める。その必要性とは、歴史教育は歴史の継続性の中から、人の心の愚かさ・恐さ・狡さ・そして真なる良心・公の心、等人間の本質や人生の機微を学び、国家民族の誇りを悟り、民族の輝ける未来の為、又より良き人生の為の歴史観・大局観を養う為に必要であるからだ。西欧化された宗教やイデオロギーでは人類は救われぬ事実を、我々日本人は痛感している筈だ。

今や世界は 21 世紀の体制へ移行する最終局面を迎えつつあり、世紀の転換期でもある。文明法則史学によれば、この転換期の特徴でもある自然異常も含む混乱は 2075 年ぐらい迄続くと予想されている。この様な時代に必要な事は国民の危機感であり、この危機感の認識が無ければ、安定的で強いリーダーの出番はないだろう。この時代に必要なことは、大局観に基く正しい判断の出来る、決断力のある強いリーダーシップである。国会で揚げ足取りに終始してい

る暇など無い筈だ。今から日本に必要なのは、現実を直視し、長期安定的で強力な体制を固める事ではないのか！！

それと大切な事は**ヘレン・ミアーズ著「アメリカの鏡日本」に記された如く、先生であった欧米の真似をして、欧米から「出る杭」として徹底的に叩かれた事を忘却してはなるまい。しかし叩かれはしたが日本の目的であるアジアの独立は、アジア人の自覚を促し、目的は果たされた。**

注）「アメリカの鏡日本」でのヘレン・ミアーズの主張
日本軍による真珠湾攻撃以来、我々アメリカ人は、日本人は近代以前から好戦的民族なのだと信じこまされた。しかし、前近代までの日本の歴史を振り返ると、同時代のどの欧米諸国と比較しても平和主義的な国家であったと言える。開国後、近代化を成し遂げる過程で日本は、国際社会において欧米先進国の行動に倣い、「西洋の原則」を忠実に守るよう「教育」されてきたのであり、その結果、帝国主義国家に変貌するのは当然の成り行きだった。以後の好戦的、侵略的とも見える日本の行動は、我々欧米諸国自身の行動、姿が映し出された鏡といえるものであり、東京裁判などで日本の軍事行動を裁けるほど、アメリカを始め連合国は潔白でも公正でもない。



終戦後は日本の建国の理念である八紘一宇という高貴な精神文化が続いた、日本的思想＝大和魂や武士道・厚き人情・亡びゆく又は散りゆく者の中に美を見い出す「もののあわれ」・「惻隠の情」という「独特な情緒」・「独特な感性」を持つこの思想こそ、今後の世界を救う最も高貴な精神文化だと信ずる。この独特な精神文化はアインシュタイン他、多くの外国の賢人達から認められ、賞讃を得た文化でもある。我々はこの尊き、高貴な感性や精神が、日本人の心の中に眠っている事を再確認し、又この精神を継承していることに自覚と感謝と

誇りを感じ、この伝統ある心を再び呼び起こす必要がある。

高次元で高尚な国史・文化・精神で形成された我国の伝統・道徳・価値観・生活様式等こそ、人類救済の指針を提示する有効な処方薬であり、国内・国外に宣布すべきではなかろうか！！　攻撃的・排他的・独善的な西欧の思想を超越する包容力のある理念としても日本的思想を拡散宣布すべきだと信ずる。

本年がその理念への啓蒙・啓発の更なる発展に資する良き年となるべく、皆様と共に全力を尽くして邁進して参りたいと存じております。宜敷くお願い申し上げます。　　感謝。合掌。

平成 28 年 1 月 29 日

志雲会塾長　有馬正能